研究推進校事業報告書

＜取組と成果のポイント＞

○　これまでの研究実践を改善・深化させた、令和の日本型教育に合わせた道徳教育の指導の工夫

・　これまでの研究実践を再確認し、指導方法が令和の日本型教育に合っているかどうか再検討を行った。その後、今までの実践を充実・深化させ、多角的に道徳実践を進めた。さらに、道徳推進教師などが模擬授業や示範授業を行い、目指す道徳を確認できた。

・　外部講師を招き、生徒や保護者向けに講演会を行うことで、授業では得られない考え方や生き方について学ぶことができた。また、教師対象の研修に外部講師を招くことで、教師自身の授業力向上につながった。

○　家庭・地域との連携を生かすための工夫

・　助産師に命の授業を行ってもらい、生徒や保護者に向けて命の大切さ学ぶ授業を行った。保護者の思いを生徒が知ることや保護者に向けて授業を行うことで、家庭との連携を深めることができた。また、公開授業は道徳の授業を行い、学年通信などで保護者に対して道徳の関心を高めることができた。

・　小中連携の取組を深めたり、地域のボランティア活動や行事に参加する機会を設けたりして、地域との連携を深めることができた。

1　研究推進校の概要

学　校　名	所　在　地	電 話 番 号	生徒数	備　考
一宮市立浅井中学校	一宮市浅井町前野字郷西145番地	(0586)28-8757	538人	

2　研究課題

（１）「特別の教科　道徳」の指導力向上のための工夫

①　これまでの研究実践を改善・深化させ、令和の日本型教育に合わせた道徳教育の指導法を工夫する

②　指導力を向上させるための新しい指導法や教材活用法を工夫する

（２）家庭・地域との連携を生かすための工夫

①　保護者が授業や行事に参加できる場を設定し、得た成果を道徳科の授業に生かす方法を工夫する

②　家庭・地域との連携を深めるために、保護者や地域の意見を道徳教育に生かす方法を工夫する

3　研究主題

「特別の教科　道徳」を要とした道徳教育の充実
―家庭・地域との連携を生かした道徳教育の推進―

４　研究の概要及び特色

（１）研究の概要

浅井中学校は一宮市の北部に位置し、住宅地と田や畑などの農耕地が混在している地域である。中心部から離れていることもあり、比較的地価が安いが交通不便であり、他地区から移り住んでくる人は多くない。そのため、地域住民の結びつきが強く、地域の活動が盛んである。その反面、要保護や準要保護の生徒も多い。

本校は平成 29 年度より、「いのち」の授業を道徳教育の柱にして改革を行ってきた。特に、平成 30 年から２年間は、「いのち」について主体的に考えることを通して、生徒が自信をもって生きていけるよう道徳授業や講演会を積極的に行ってきた。そして、生徒の自己肯定感を高め、「共に生きる」という意識を高めてきている。

２年間の研究実践により、「いのち」の授業を中心とした小単元構想による教科横断的な道徳教育や教師の指導力向上を図った。同じ資料で指導者を交代して行う授業（リレー道徳）と、同じ資料・指導者で学級を回って行う授業（ローテーション授業）による道徳授業、思考ツールやファシリテーションを活用した板書や話し合いの研究などの工夫された指導法は定着している。しかし、依然として、全国学力状況調査の質問紙や県教育委員会作成の意識調査では、自己肯定感が低いと感じる生徒や、他者に認められた経験が少ないと回答した生徒の割合が高い等の課題が見られた。また、大幅な教職員の転出入により、研究の継続性に課題も見られる。今年度はテーマにせまるために、基礎的な道徳の指導力を高めることを目標とした実践を以下のように行った。

本校の教育目標である、「『いのち』を尊び、知・徳・体の調和のとれた、心豊かでたくましい生徒を育成する」を柱に、「いのち」の授業を中心とした小単元構想による教科横断的な道徳教育を、令和の日本型教育に合わせた形に整え、道徳の全体計画を検討した。また、令和の日本型教育を実現するためにデジタル・シティズンシップ教育を推進し、従来の道徳と学習用端末を使った道徳のハイブリッド化を図った。さらに、外部講師を招聘することで、様々な校内研修に取り組み、道徳教育の指導力向上を目指した。

「特別の教科　道徳」の指導力向上のための工夫の取り組みとして、年６回にわたり外部講師を招き、主体的・対話的で深い学びができるような指導方法を取り入れた道徳の授業展開、発問、評価の在り方などについて研修を進めた。講師に岐阜聖徳学園大学准教授の山田貞二先生や金沢工業大学准教授の平真由子先生を招き、これまでの研究実践をさらに拡充・深化できるよう努めた。複数の講師を招聘することで、多角的に本校の道徳実践を進めた。

家庭・地域との連携による道徳教育の取り組みとして、家庭に向けては、道徳の公開授業の実施や道徳的資料の事前アンケート、通信の発行などを通して家庭で道徳に触れ合う機会の充実を図った。また、地域に向けては、地域の行事やボランティア活動などに参加している子供たちの様子を学校運営協議会やＰＴＡの方々から収集し、保護者や地域の意見を道徳教育に生かしたり、地域教材を開発したりする取り組みを行った。生徒向けや保護者向けの講演会などの講師の人選依頼を通して、連携強化を図った。

研究の進捗状況を確認するために、研究による成果の見込みを３点でとらえることとした。

① 道徳教育の抜本的改善・充実に係る成果の見込み

複数の講師に関わっていただくことで、様々な角度から道徳教育を推進することができ、本校の現職教育部の取り組みとの相乗効果を期待することができる。また、メ

ンター制度を生かし、道徳教育で学んだ指導方法を他教科へも広げることで職員同士の活発な意見交換が行われ、少経験の職員の授業力の向上も期待できる。

② 家庭・地域との連携による道徳教育の取組による成果の見込み

道徳教育の充実に向けて家庭の協力は欠かすことができない。子供たちの道徳性を育むためには、家庭の道徳力を生かしたり、底上げしたりすることが大切であると考える。家庭の道徳への意識が高まることにより、子供たちの道徳性がさらに高まる相乗効果も期待できる。また、子供たちが地域の行事などに参加する機会を得ることで、自分が必要とされることに喜びを感じ、子供たちの自己有用感を高めることにも期待している。

③ デジタル・シティズンシップの取組の成果の見込み

本校では、本年度の現職教育の研究主題を「学びに向かう力の育成と『探究』と『対話』を中心とした授業展開の工夫～デジタル・シティズンシップの育成と道徳の授業におけるＩＣＴ機器の活用～」と設定し、ＧＩＧＡスクール構想に合わせ、端末の有効活用を進めてきた。以前から道徳科を中心に進めてきた『探究』と『対話』を中心とした授業展開の工夫を各教科でも継続して研究していく中で、デジタル・シティズンシップの考え方を取り入れていくことが重要であると考えた。そこで、子供たちが主体的に、ＩＣＴ機器を「文房具」として活用したり、多様な資料を選択・活用したりできるようにしていくことで、デジタル・エチケットやデジタル規範など、日常的に活用する上でのデジタル世界における権利や責任を理解し、安全で合法的・倫理的な方法で行動することができる道徳性を高めるようにしていきたいと考え、実践を行った。今回の研究に合わせてデジタル・シティズンシップ育成の取組を全職員が行うことで、さらなる成果が期待されると考えた。

（２）研究計画

月	実施内容	行事等
４～５月	・教職員への研究内容、研究目的の周知と共通理解 ・研究組織と研究計画の策定 ・道徳年間計画の策定 ・研究主題・仮説の設定 ・授業参観（道徳一斉公開授業参観） ・示範授業（市内全小中学校向け公開授業） （本校道徳推進教師による示範授業） ・校内研修 ・意識調査（県教育委員会作成）	・授業参観 ・学年保護者会 ・ＰＴＡ総会 ・スマホ安全教室 ・校外学習（１・２年） ・小中連携あいさつ運動 ・小中連携ノーテレビ・ノーゲーム・ノーケイタイデー
６月	・現職教育講演会、示範授業 （特別支援学級にて外部講師と合同授業） （講師：岐阜聖徳学園大学准教授　山田貞二先生） ・道徳授業一斉公開（授業参観）	・公開授業 ・引き渡し訓練 ・修学旅行 ・部活動激励会
７月	・道徳授業公開（保護者参加） （２年生の生徒に向けた「外部講師による命の授業」） （講師：助産師グループＯＨＡＮＡ） ・アンケート実施（校内作成）	・保護者会 ・セルフディフェンス講座（１年生） ・薬物乱用防止教室（１年生）

８月	・示範授業（公開授業） （外部講師との合同授業） （講師：金沢工業大学准教授　平真由子先生） ・校内研修 ・各種学習会に参加	・マナー講座（２年生） ・職場体験（２年生）
９月	・授業実践と研究協議	・あいさつ運動
10 月	・道徳授業公開（学校訪問）	・体育祭 ・小中連携あいさつ運動
11 月	・道徳授業一斉公開（職員相互授業参観） ・現職教育講演会（外部講師招聘（しょうへい）） （講師：岐阜聖徳学園大学准教授　山田貞二先生） ・学校公開週間（道徳授業参観） ・研究推進校視察（道徳授業参観）	・合唱祭 ・国際交流学習（１年生） ・学校公開週間 ・小中連携ノーテレビ・ノーゲーム・ノーケイタイデー
12 月	・現職教育講演会、示範授業 （特別支援学級にて外部講師と合同授業） （講師：岐阜聖徳学園大学准教授　山田貞二先生） ・アンケート（校内作成）	・保護者会 ・福祉実践教室
１月	・現職教育講演会（外部講師招聘） （講師：岐阜聖徳学園大学准教授　山田貞二先生） ・示範授業（市内全小中学校向け公開授業） （特別支援学級にて外部講師と合同授業） （講師：岐阜聖徳学園大学准教授　山田貞二先生）	・保護者会（３年生） ・小中連携あいさつ運動
２月	・意識調査（県教育委員会作成）	・小中連携ノーテレビ・ノーゲーム・ノーケイタイデー ・卒業生を送る会
３月	・１年間の取組の反省と改善点の公開	・卒業式 ・己書（２年生）

（３）研究課題にかかわる取組

＜「特別の教科　道徳」の指導力向上のための手だて＞

指導力向上のために、校内現職教育の充実と外部講師による研修を効果的に組み合わせた取組を行った。

①　校内現職教育

ア　道徳教育の指導計画

４月５日に現職教育の時間に全職員に向けて、本年度の道徳教育の指導計画を提案した。今までの本校の実践の確認を行い、転勤者や初任者が今までの実践を無理なくできるような研修を行った。

(ｱ) 小単元構想

学校全体で、１学期は『いのち』、２学期は『人』、３学期は『心』について考えたり、学んだりすることをテーマとして、各学年で関連する内容項目を扱う数時

間の道徳授業を小単元化した。

また、小単元の中に、各教科や領域、学校行事などを組み込むことにより、総合単元的な学習とした。

【小単元構想】

主題		教材	視点	内容項目	ねらい	指導者
A	相手の立場に立って考える	「いじり」？「いじめ」？	B	相互理解 寛容	いじりといじめの違いから、考え方や感じ方は人それぞれ異なることに気づき、相手の立場に立って考え行動しようとする態度を育てる。	ア
B	個性を表現すること 受け入れること	ショートパンツin アメリカ	B	相互理解 寛容	それぞれの個性や立場を尊重し、寛容の心をもって謙虚に他に学ぼうとする心情を育てる。	イ
C	困難を乗り越え 挑戦し続ける	夢への挑戦「パラカヌー」	A	希望と勇気 克己と強い意志	挑戦し続けることが日々の生活を充実させることに気づき、自らの掲げた目標に着実に到達しようとする態度を育てる。	ウ
D	大切な人のために自分を変える	ドラえもん 最後の日	A	希望と勇気 克己と強い意志	のび太くんが動かなくなったドラえもんのために努力し続ける姿から、大切な人のために目標を達成しようとする態度を育てる。	エ
E	誠実な生き方	裏庭でのできごと	A	自主、自律 自由と責任	誠実に行動することや責任ある行動をとろうとする態度を育てる。	オ

(ｲ)　リレー・ローテーション道徳

教師の力量向上をねらいとし、同じ資料で指導者を交代して行う授業【リレー道徳】と、同じ資料・指導者で学級を回って行う授業【ローテーション道徳】を小単元構想と組み合わせて取り組んだ。

リレー道徳を組み合わせることで、授業の反省点や改善点を次の指導者に引継ぎ、主体的な検討の時間が設けられ、授業力向上の面からも有効性が見られた。

【リレー・ローテーション道徳の資料】

リレー・ローテーション道徳											
担任	ア		イ		ウ		エ		オ		
学級	1組		2組		3組		4組		5組		
	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	教材	指導者	
	教材研究　検討会　指導法研究　指導案立案										
1週	A	ア	B	イ	C	ウ	D	エ	E	オ	教材が移動（リレー道徳）
	検討会						検討会				
2週	B	ア	C	イ	D	ウ	E	エ	A	オ	
	検討会						検討会				
3週	C	ア	D	イ	E	ウ	A	エ	B	オ	
	学年検討会　教材研究　指導案修正										
4週	D	エ	E	オ	A	ア	B	イ	C	ウ	指導者が移動（ローテーション道徳）
	検討会						検討会				
5週	E	オ	A	ア	B	イ	C	ウ	D	エ	
	検討会						検討会				
	学年検討会　最終指導案作成　記録整理・保存										

イ　道徳模擬授業

４月の校内研修会にて、「特別の教科道徳の指導方法例」として道徳推進教師と現職教育担当研究主任による模擬授業を行った。この模擬授業では、「泣いた赤おに」を題材にして、生徒たちに多面的・多角的に考えさせるための授業づくりのポイント

を説明しながら行った。授業づくりのポイントとしては、「ファシリテーターを中心としたグループ活動」、「思考ツールを用いた板書」、「子供の意見を用いた探究課題の設定」の３つとした。

模擬授業の中で、実際に教員同士でグループ活動を行い、発表された意見をイメージマップで板書し、発表された意見から本時の探究課題を設定した。本研修をもとに道徳の授業づくりをする際の手本を示した。

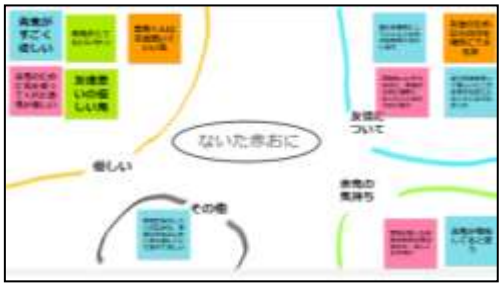
ウ　道徳公開授業

本校の２年生に行った模擬授業の内容で公開授業を行った。参観者は本校での勤務経験が浅い職員を中心とし、模擬授業で示した授業づくりのポイントに加えて、「ＩＣＴ機器を用いた教材の提示」、「Chromebook を用いたグループ活動」、「ティーム・ティーチングによる発問と板書の役割分担」の３点を意識して行った。

「ＩＣＴ機器を用いた教材の提示」では、範読をプレゼンテーションソフトにて紙芝居形式で行い、生徒の興味関心を高める工夫をした。「Chromebook を用いたグループ活動」では、ジャムボードを用いた意見交換をし、グルーピングを行わせた。

「ティーム・ティーチングによる発問と板書の役割分担」では、生徒に発問をする授業者と生徒の意見を板書する授業者を分けることによって、発問の時間を多く作ることができた。この公開授業によって、「本校の教職員の道徳授業の改善と充実」、「デジタル・シティズンシップの育成とＩＣＴ機器の活用」の推進を図った。

【Chromebook の活用風景】



【ジャムボードによる意見交換】

② 外部講師による指導

ア　山田貞二先生による指導（４月 21 日）

４月21日に、岐阜聖徳学園大学准教授の山田貞二先生を外部講師に招き、「対話」を創ることをベースに道徳授業を行うことの大切さをご指導いただいた。家庭・地域との連携を生かした道徳を行うためには、生徒同士の対話や生徒と保護者の対話など、対話を通して考えを深めていく活動が欠かせない。本年度、山田貞二先生には、合計４回の継続的な指導を依頼しており、段階的に「対話」を深める手法を学び、子供たちと考え、議論する道徳へつなげることを確認した。

【特別支援学級での示範授業】

イ　山田貞二先生による指導（６月 29 日）

６月29日に山田貞二先生による特別支援学級での示範授業を行った。普段の学習会では、通常学級についての指導が中心になることが多いため、特別支援学級に向けた道徳授業を示範授業という形でご指導いただいた。

一宮市内の特別支援学級の担当者にも示範授業の参観を呼びかけ、校外の特別支援学級の担当者とともに示範授業を参観した。特別支援学級に在籍する生徒に向けて、書かれた文字だけで授業を進めるのではなく、視覚や聴覚を通して理解を深めるアプローチの仕方を学び、映像によって理解を深める方法の有効性を学んだ。示範授業の後、特別支援学級の担当者から日常の悩みを山田貞二先生に相談する機会を設定し、「普段困っていたことが解消できた」や「特別支援学級への道徳授業の悩みが減った」など、前向きな意見が聞かれ、家庭・地域との連携を特別支援学級においても取り組んでいくことを確認した。

ウ　平真由子先生による指導

８月21日に金沢工業大学准教授の平真由子先生をお招きし、道徳の師範授業と職員向けの講演会を依頼した。平真由子先生は、心理学を専門とされており、道徳教育を心理学の視点で研究されている。

今回の示範授業では「Well-being」を扱った。道徳科の目標である「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことと関連しており、職員にとってとても学びになるものとなった。事前に３年職員と平真由子先生とがリモートで示範授業の打ち合わせを行い、「Well-being」について共有するとともに、指導方法について話し合った。そこで、「Well-being」について話し合う上で、タブレット端末を活用し、クラスとクラスをつなぐ実践を行うことを決めた。

【平真由子先生の授業風景】

授業では、Googleのアプリケーションソフト Google Meet を活用し、対面で授業を受けているクラスと別のクラスをつなぎ、学年道徳の形で実施した。導入は、「Well-being」という概念について、「ウェルビーイングカード」を用いて、説明を行った。展開では、自分の「Well-being」のために必要なものを「ウェルビーイングカード」から選ぶ活動を行い、グループで共有することで自己理解と他者理解を促した。さらに、「浅井中学校に関わる全ての人がウェルビーイングを感じるために必要なこと」を課題として考えを深め、共有した。考え方が異なる人々と合意形成を図ることの難しさに直面したが、全てのクラスの生徒の様々な意見を聞くことができる環境であったため、それらを手がかりとして自分なりの答えを見つけることができた。

＜家庭・地域の連携を深めるための手だて＞

指導力向上の取り組みと合わせて、授業や行事に保護者が参加できる場を作ることや道徳の授業で学んだことを家庭でも話すことができる教材を吟味することで、道徳を活用した家庭・地域の連携を深める取組を行った。

①　８月21日の授業終了後の取組

家庭との連携を深めることで生徒の道徳性をより養うことをねらいとして、授業での生徒の意見をまとめ、学年通信を発行し、各家庭に配付した。生徒たちは、通信にまとめた生徒の意見を改めて読み直すことで、授業を思い出し、考えを深めている姿が見られた。また、家庭で通信をもとに家族と話すように依頼したところ、授業のことや「Well-being」について話したとの反応が確認できた。今回の実践では、発信することを通して家庭との連携を図ったが、保護者から意見をいただいたり、アンケートに回答していただいたりするなど、双方向の連携ができるようにしていく必要があると感じた。

②　授業参観

ア　４月 20 日　授業参観

本年度初めての授業参観を４月 20 日のＰＴＡ総会の日に行った。多くの保護者が参観する中で、家庭でも授業について話しやすい教材を選んだ。道徳授業をきっかけに家庭で話し合う機会をもつことができれば、家庭との連携を通して、道徳性をより深めることができると考えた。

今後の授業参観で積極的に道徳授業を取り入れていきたい。

イ　７月７日　命の授業

７月７日に、教育助産師グループＯＨＡＮＡさんによる命の授業を２年生と保護者を対象にして行った。この授業の目的は「命と性の大切さを実感し、自己肯定感を育む」ことであり、生徒たちは授業内でさまざまなことを学んだ。

特に、家庭の連携を図るために、保護者に向けて事前に「お子さんが生まれたときのエピソード」を書いてもらっており、講師の方がエピソードや思いを読み上げた。また、授業終了後に生徒がいない体育館で参加された保護者に向けての講演会も実施した。中学生にどのように接すればよいのかを助産師の立場から語っていただき、保護者は思春期の子供とのかかわり方を学ぶことができた。

【命の授業の様子】

③　その他の取組

ア　スマホ安全教室

５月１日にスマホ安全教室を携帯電話会社の職員に来校してもらい、実施した。最近の中学生はスマホによるトラブルが増えている。子供たちは見えない相手とのコミュニケーションの難しさを改めて確認し、トラブルをどう防げるかを自分事として考えることができた。今後は情報モラルの教育が欠かせない。道徳の授業でも、子供たちが興味をもちやすいスマホを題材にしたものを選び、それをきっかけとして道徳性を高める授業を展開していきたい。家庭に向けては、保護者向けの資料を配付し、共通の話題を子供と一緒に考えることを通して、家庭での情報モラル教育の必要性を伝えていきたい。

イ　ボランティア活動

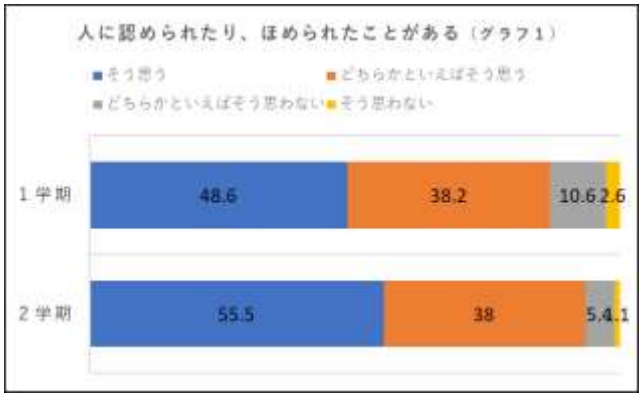
子供たちが地域とのかかわりを実感できる機会を作るために、福祉ボランティアや地域のお祭りなどのボランティアを積極的に募集した。子供たちが地域の中で活躍し、認められることで道徳性を高めていきたいと考えた。また、ＰＴＡボランティアを行事ごとに募った。子供たちだけでなく、保護者にとっても、子供と一緒に行事に参加することで共通の話題や価値観を共有することにつながり、自己有用感や道徳性の高まりを感じた。

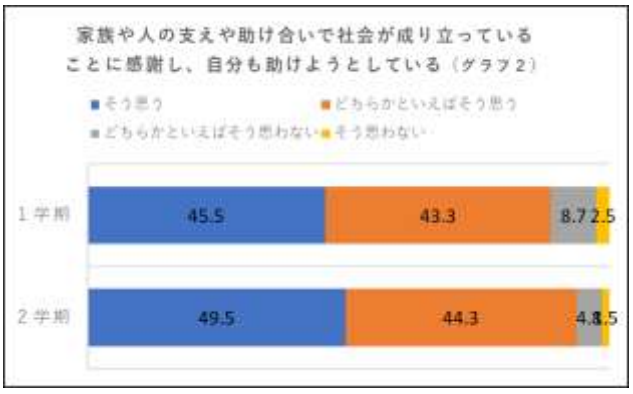
【お祭りの準備をする様子】

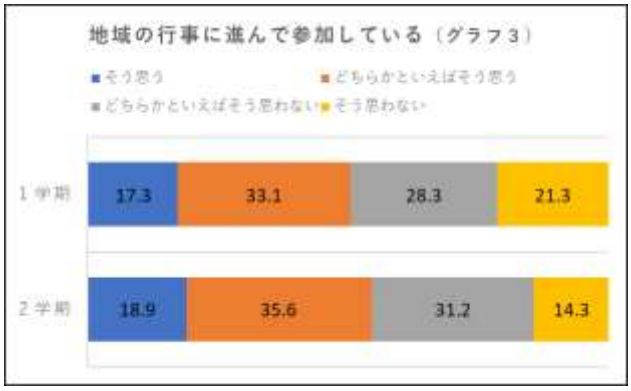
5　研究の評価

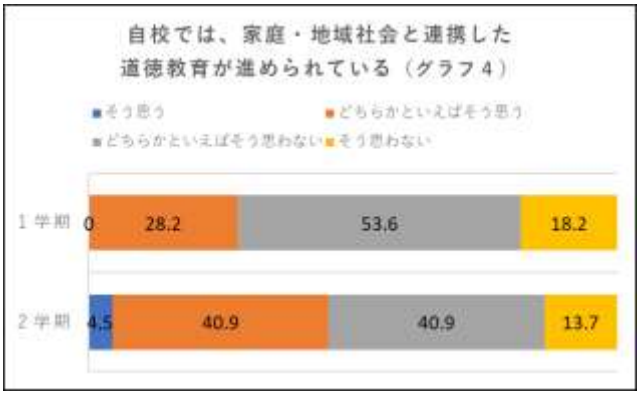
（１）研究の成果

７月と 12 月に行った道徳に関する意識調査を見ると、「人に認められたり、褒められたりしたことがある」という質問に対して、「そう思う」または「どちらかといえば、そう思う」と回答した生徒の割合は１学期 86.8%に対し、２学期は 93.5%に増加している[グラフ１]。この意識調査から生徒の自己有用感の向上を見て取れる。また、「家族や多くの人の支えや助け合いで社会が成り立っていることに感謝し、自分も助けようとしている」という質問に対して、「そう思う」または「どちらかといえば、そう思う」と回答した生徒の割合は１学期 88.8%に対し、２学期は 93.8%に増加している[グラフ２]。このことから、地域や家庭との関係を大切にする意識が高まったことがわかる。さらに、「地域の行事に進んで参加している」という質問に対して、「そう思う」または「どちらかといえば、そう思う」と回答している生徒の割合は１学期 50.4%に対し、２学期は 54.5%に増加している[グラフ３]。このことから、地域とのつながりをもとうとする生徒が増加したと考えられる。









（２）今後の課題と取組

学校公開日に道徳を継続して行うことで、保護者にも本校の道徳に対する考え方を定着させることができた。子供たちが授業で考えた内容を家庭でも話題にすることで道徳性の高まりを見ることができた。しかし、本校の教職員を対象にした意識調査では、「自校では、家庭・地域社会と連携した道徳教育が進められていると思う。」という質問に対し、54.6%の職員が「そう思わない」または「どちらかといえばそう思わない」と回答している〔グラフ４〕。これは道徳教育の実践において、家庭や地域と連携した取組を行っているという実感がもてていない職員が多いということを表している。今後は教職員に対しても、学校・家庭・地域が連携した道徳教育をさらに進めていけるように改善していきたい。

「特別の教科　道徳」の指導力向上のために、これまでの研究実践を改善・深化させることを目指し、引き続き外部講師による新たな指導技術が学べる学習会を継続的、計画的に行いたい。今後も学校公開日や公開授業など、保護者や一宮市内の教師が授業参観できる機会があるので、現職教育の充実を図り、教師同士が学び合える環境を整えていきたい。

また、家庭や地域との連携を図るために、地域で活躍している職業人に学校で職業について語っていただく「職業人と語る会」を行い、地域とかかわりあいで生まれる道徳性を高めていきたい。さらに、道徳の授業だけでなく、「福祉実践教室」や「国際交流学習」においても、家庭や地域と連携できるように工夫をし、道徳性を高めることができる取組にしていきたい。